

衣服を介して口伝される衣文化の成り立ちと 仕組みの考察

前田博子

(2019年3月5日受理)

Consideration of the Formation and Mechanism of Clothes Culture to be Oralized through Clothing

Hiroko MAEDA

要旨：刺繍、刺し子、布接ぎなど貴重な布を大事に使い続けるために各家々には代々継承されてきた衣服や針仕事がある。繕いや縫いによって継承される衣服を制作・研究する中で、平成31年2月14日(木)～17日(日)に福井県福井市にある福井市美術館で開催した個展『engagen -衣服が記憶するわたしたちの過ごした時間- 前田博子展』に出品した作品の一部とそれらの制作プロセスについて論じるものである。

Key words：衣文化 衣生活 暮らし 衣服 儀礼服 くりまわし ワークショップ デザイン 場づくり



会場風景1 撮影：ハセガワヒロシ



会場風景2

1. はじめに（展覧会主旨全文）

わたしたちは常に衣服を纏い暮らしています。衣服はなくてはならないもののはずが、いつしか使い捨てられるようになりました。布や衣服は人と人、人と社会をつなぐものとして技術が開発され、制作されています。わたしたちが常に着用している衣服は消耗品として扱われがちですが、わたしたちの暮らしを支えていることに変わりありません。

そんな現状を踏まえ、集めた衣服や集まった衣服であらたな衣服を制作してきました。それらはわたしにとって縁のある人のためにつくった日常着や儀礼服です。誰かが着終えた服をまた誰かが着ることで、衣服の記憶が追記されると考え、想いを纏うという内的な事象を具現化しようとしています。

本研究はわたしの近い人たちのためにつくった衣服『可変の衣服』や『おもてうらなし おもてなし』『赤い衣服のちゃんちゃんこ』『赤くなったちゃんちゃんこ』とわたしの知らない人が遺した布によるインスタレーション『見知らぬ女性がのこした空』『見知らぬ女性からのおすそわけ』とが混在し

ます。これらは一見関連性のないものだと思われるでしょう。しかし共通することはそれら全てが「畳んであった」ということ。わたしたちの畳むという行為には小さな約束が込められています。「いつか着るよ」「いつか使うよ」これらの約束を果たす時わたしたちは畳んだものを広げるのです。畳んで広げ、畳んでは広げを繰り返すことで日常を積み重ねています。その重なりによってヒトが過ごした時間や日常を衣服が記憶し記録しています。本研究は家庭内手芸からほんの少し家庭から社会へ出てみたというもので、あくまでも家庭内で行われていた繕いや小さな日常行為を他者にたいして行うことから小さなムーブメントを生み、文化再建ができるのではないだろうかという私的興味から始まっています。

ヒトには関係や想いをあらわす矢印が向かっていたり、矢印を送っていたりします。それらの相互作用によって社会が形成され日常の「暮らし」へとつながっていくのではないのでしょうか。ヒトとヒトとの間にうまれる小さな矢印が家をつくり、村をつくり、社会を形成してきました。わたしたちは営利主義、便宜主義に溺れるあまり、営むことへの敬意やモノへの尊厳を失っています。それらの事象について疑念を抱いていただくための提案です。本研究は効率の良い暮らしを求めるものではなく、面倒なことをわざわざやってみて、非効率な時間を過ごすことから、より豊かなくらしを模索しようとするものです。

布も人も重宝された昔々。そうではない現状社会に対して問いを投げかけたいのです。

本論文は私自身の問いを出発点として人や社会、それらを包む衣服について省察、考察していただくための研究であり活動をまとめたものである。

2. 調査研究／口伝が活かされる産業の仕組み

家庭内での口伝が生活をより豊かにしてゆくきっかけであると考える一方、産業でも同様に口伝されるべきものがある。物をつくる過程においてもやり方や方法論など伝えてゆく事、共有すべき事は非常に多い。書き記しておくほどでもない「覚えておく事」「小さなルール」など日常の中には口伝的事柄

が多く存在する。

その中でも特徴のある企業の訪問を行った。それらの詳細について以下のようにまとめる。

山形県天童市の天童木工株式会社では暮らしに密接した家具の製造をおこなっている。工場としての面白い仕組みがあった。それは「親方制度」を用いていることである。入社して配属された部署から部署移動は基本的にはない。勤め終えるまで同部署にて働く。そこは異世代の人によって構成されている。つまり各部署に熟練した職人が在中するため、口伝的な教育と技術継承が可能となっている。

広島県尾道市にあるONOMICHI DENIM PROJECT。デニムは作業着として開発され使用されてきたが「おしゃれ」や「ファッションアイテム」としての支持が多いことから仕上がったデニムを洗い加工し経年変化を機械生産したものを商品として売り出している企業がほとんどである。そんな中、洗い加工等の後加工を機械で行わずヒトによっておこなっているのがONOMICHI DENIM PROJECTである。人々の日常の動きや作業跡を人工の後加工と同様に人為的後加工として捉えている。そのため協力者は尾道で仕事をしている人が選ばれ、2本のデニムが渡される。その渡された後加工される前のデニムを仕事着として一年間着用し続け、デニムにその人なりの柄や跡を付ける。デニムの仕上げ加工の工程を働く人に委ね、仕上げをもらう。つまり最終的な後加工は尾道で働く人が各人の職場で個々人の日常の積み重ねによってつくっていることになる。完成したデニムはつくり手の日常と仕事の跡をうつしとった状態で販売される。藍色の落ち具合や穴のあき具合によって価値が定められている。また年に一度つくり手と買い手が一同に集まるサミットが開催されている。これらは人と人がつながるプロジェクトとして期待が寄せられている。働く跡が残った衣服に価値が与えられそれらを販売し、引き継ぐ人がいる。地域活性の新しい試みに合わせ、衣服の捉え方を変えてくれるプロジェクトである。販売される商品はつくり手が一年間履き続けたモノなので、ついた跡には嘘ではない日常が含まれている。ポケットに入れた携帯電話の跡や

長靴を履いていた跡、膝をついて接客していた跡など現実的な日常が蓄積され個々の摩擦によって色を失い、素材を破壊する。わたしたちはその衣服に起きた現象の意味を探ること、知ること、知らされることによって共感を得ていると推測した。

3. 展覧会リーフレットの作成とデザイン意図

展覧会タイトルを「婚約」を意味する「engage」と人々が集う「園」でありたいという願いをこめてengage + en = 「engagen」エンゲージエンとした。「縁」ではじまり「エン」が重なり、新たに「en」ではじめられるようにという意味を込めた。

また衣服や布は畳んで広げるものであること、制作研究の中で「畳む」という行為がわたしの制作の要であることからリーフレット（図1）は畳んで広げられるデザインとした。デザインは本学卒業生の松浦えり（株式会社真空ラボ）との共同制作である。

人と人がつながりながら大きな社会は形成されている。日常の積み重ねやヒト、モノ、コトがつながってゆく様子と日常そのものを表紙デザインとしてある。詳細にみていくとイラストが書かれた部分は英字を元に作成されたイラストである事がわかる。英字は「engagengagengage」となっており「engage」が「en」を重ねて「engage」とつながるようにデザインされている。またこの展覧会での作品制作、活動等に協力して下さった方々を配置しているという想いを含めたものである。



図1 リーフレット

4. 制作研究／集めた衣服・

集まった衣服で新たな衣服をつくる

本制作は『おもてうらなし おもてなし』『あかくなったちゃんちゃんこ』『七五三の三』からなっており、それら全て人々から集めた衣服や集まった衣服によって構成している。

人生儀礼における衣装、衣服を制作するにあたり、衣服が人と人を繋ぎ、それらが着用者と関係者を繋げてゆけるものであることを提案する。

一過性のイベントや行事で着用される衣服は軽視されがちであるが、それでも大切な人生儀礼において纏うべきものを再考したい。

主な制作内容は集めた・集まった衣服を解体し、それらを再構築することで新たな衣服をつくる。制作過程では衣服や布にハサミを入れない。ハサミを入れる行為は布を扱う者からすると勇気を必要とする行為であり、遮断、断絶を意味するので、布や衣服を切りたいとは思わない。制作におけるコンセプトは「縁」を大切にするものである。そのため縁を切らないために、布や衣服にハサミをいれず、「縫い」「繕い」でつなぎ、捨てずにくりまわすことを主とする。

4-1 おもてうらなし おもてなし／結婚儀礼服

結婚儀礼における礼服を制作する。主な制作内容は衣服の収集、衣服の解体、衣装の構築。衣服の収集については新郎、新婦に新郎新婦の関係者、家族や友人、知人から白いシャツやブラウスを集めてもらうところからはじまっている。そして集められたものをパーツごとに解体し人体と衣服の関係を明確にしながらあらたな衣服を構築してゆく。新郎、新婦からは衣服を提供してくれた人との関係性を事前に明記してもらい、その人たちが自身のどの部分をつくりあげたのかを書いてもらった。それらを元に衣服を再構成したものである。

新婦が着用するドレスについては「心(心臓)に近い部分は家族、母や祖母により形成され、自身が歩みだしてからは友人により形成された。」

上記の内容を参考に祖母の衣服の上に母の衣服を縫い合わせ、娘が着ることから三世代継いでいくコ

トを表現し、祖母の衣服についていたレースは縁取るという意で裾や襟元などに縫い付けた。

新郎のシャツについては右側、左側と二名の友人で形成されている。

襟をつねにただしてくれる妻になれるようにと、新郎衣装の襟は新婦から提供された衣服の襟を使用している。

洋服は様々なパーツから成り立っており、その各部位には意味を込めやすいというのがパーツを再構成する理由の一つである。

例えば袖。衣服には袖がついており、左袖右袖、左と右の袖で一人の人をあらわすことが出来る。左と右を合わせると一人のヒトとなり、袖の集合体が集まると人々になる。そして右手もしくは右腕と左手／左腕が合わさる様子はヒトが手を合わせて願う、もしくは守る様子に見立てることができる。

それらを、縫い合わせると、ヒトとヒトが手を重ねながらつながってゆく様子をあらわすことができる。これらはスカートを形成する構造に取り入れた。手と手（右袖と左袖）が合わさったところは子宮の辺りとなっていて、新婦でもあり妊婦でもある彼女を知人友人が守っている、願っている様子を表現している。

これらの制作プロセスの背景をどこまで他者に伝えるべきなのだろうという疑問がうまれた。誰かと誰かの関係性とはとても私的なことで、他者に説明する必要はなく、当の本人が伝えたい人に伝えたい事だけを伝えるべきではないのだろうか。ただ着用者にはこれらが誰の何の部分なのかわかっており、より信憑性をあたえることができる。

また衣服における衣服の意味や成り立ちは着用者の口伝によって成立すると感じた。わたしは衣服を介して口伝されてゆく仕組みは家庭内や友人といったとても小さなコミュニティの中での事象を伝達することを理想とし、口伝可能な範囲であると考察する。

フォーマット化された結婚式では母親がパールダウンをして父親とバージンロードを歩くのが通常であるが、今回はパールダウンではなく母親が日常的に自身のために結んでいた衣服の紐を娘のために結び、娘を送り出すという動作を意匠としている。そ

のため母親の衣服の胸元に付いていた紐を娘のドレスの胸元につけた。ある種母親にとっては「紐を結ぶ」という自身の日常と娘への儀礼が合わさったと推測する。

日常動作そのものが「結ぶ」という行為を通して娘を送り出すためのきっかけとなっており、行動・行為から所作をうみだす工夫である。

結婚式当日の参列者のドレスコードは白いシャツもしくは白いブラウス。

参加者には今までの感謝や人とのつながりを表現するため、当日装着してもらうモノを制作している。残布でつくった蝶ネクタイ風ブローチである。他者から衣服を集めたのはいいけれど、使わなかったものをどうするのか。捨てない工夫として、細分化して譲渡することをおこなった。譲渡された蝶ネクタイは他者にとっては一過性のアイテムなのかもしれない。しかし自身が提供したモノ、もしくは友人が提供したものと踏まえれば、当時の光景を思い出すための記憶媒体となるはずである。

これらを制作するには私自身がおこなうより、新郎新婦の手作りである方が譲渡された側にも思いが伝わりやすいと判断し、新郎新婦へ蝶ネクタイ制作を提案し、承諾してくれたため、制作に立ち会った。生地を染める量や色については新郎新婦に考察してもらった。ドレスなどの衣装に使用しなかった白いシャツ・ブラウスのパーツはほとんどが黄色に染められ、一部は茶色に染められた。黄色、茶色に染めた理由は、意味もなくひまわりが好きで、ひまわりのブーケを持つから。後でわかったことだが、新婦には内緒にしていた公開プロポーズをおこなうときに擬似的にひまわり畑を作りたかったからだとして新郎が追々教えてくれた。

作品タイトルは『おもてうらなし おもてなし』（図2）。衣装には明確な表・裏が無く、結婚式やそれまでの準備で行われる「おもてなし」の出来事を含めたタイトル名となっている。

衣服については表にも見えるし、裏にもみえる。表でも着られるし、裏でも着られる。

衣服の歴史を少し遡るとベビー服（乳児肌着）は母の愛がきっかけで縫代が表側にあり、肌 directly

たる部分が心地よくなるように縫製されている。また染色産業においても浴衣や手拭などをつくる際に使われる注染という技法は、表にも裏にも、裏にも表にも使うために開発された技術である。浴衣の表面が色褪せたり、汚れたりすれば、ほどいて裏表を変えて繕いながら縫うことでもう一度着られるようになる。これらの衣文化を取り入れた。

お色直しでは後ろ側を前に裏側を表として着てもらった。見えなかった部分が見え、見えていた部分が隠れはするものの、互いに表と裏もしくは前と後ろを行ったり来たりすることができる。衣服としての表面は本来表面とされる部分であることが多いが、肌が触れるほうが表であるという解釈もある。衣服のあり方は捉え方によって意味が変わってくるが大にしている。特に身体から導かれる部位・部分の意味にはその人なりの意を意匠として組み込みやすい。

また作業途中に気づいたことは衣服には個々人の匂いが付いているということ。その人を知らない人にとっては違和感や嫌悪感を感じるものかもしれない。しかし知っている人、信頼している人ならその付加された匂いに安心感を覚えるだろう。これらの衣服は、人の願いと想いとそして匂いを纏った新郎新婦の人生儀礼衣装／結婚式衣装となった。

集めた衣服・集まった衣服を完全にくりまわすことを目標としていたが、完全にくりまわせた訳ではない。羽織ものをつくったり、ヘッドドレスをつくったり、空間演出のためにインスタレーション空間をつくったりしたもの、使い切ることが出来なかった。使いきりたかったというのが本音である。引き続き残布のくりまわし方法については考察する。

人生儀礼の衣服でさえ、儀式が終わると不要となる。譲渡した衣服を受け取ったとき、着古されたものが、更に着古されたようにも感じ、ある種の抜け殻のようであり、とても切ない想いであった。人生儀礼とはいえ、一時的な衣装として捉えられている背景を加味すれば当たり前のことである。

衣服とは人が着用することで成立し、着用を終えた衣服からは虚無感しか得られない。

個人的感想として、新郎のシャツ以外の新郎の衣

装とご両親の正装が「レンタル」であったことにとっても驚いた。根強く残る「レンタル」という仕組みとどう向き合っていくのかは今後の課題である。

これらの衣服が継承されるかは現段階ではわからないが、継承して欲しいと願う衣服とレンタルされた衣服が同次元に存在できたことは小さな一歩かもしれない。

衣装制作の依頼者である新婦は仁愛女子短期大学の卒業生であり、ゼミ生であったことを追記する。卒業制作では縁をつなぐドレスをつくり人と人とのつながりを大切にしてゆきたいと言って卒業した。数年経った彼女が人と人がつながるドレスを着てくれたことは自身の研究テーマでもある口伝の実践結果ととらえることができる。

継承されるか否かについては数十年先までわからない。しかし生まれてくる子どもが、数十年経ったのち、また新たな家族を迎えるとき、しまいこまれたクローゼットから成熟された衣服がまた私の手元に戻り、「直す」ことを前提とした手紙を添えたことで一旦制作が終了している。

衣服としての可能性は行動や動作に意味を含めることができるということ。それらの行動によって人と人をつなぐきっかけを提示できる。

紐で結ぶ、ボタンをとめる、裾をまくりあげる。これらの所作が行動的記号として衣服に内在し、それらが文化として口伝されるしくみをつくることができる。そして儀礼服を受け継ぐという行為には衣服を畳みしばらく保管しておく時間が必要である。それらが過ごした時間は衣服を成熟させるために必要な時間なのだ。



図2 ウェディングドレスとウェディングシャツ『おもてうらなし おもてなし』

本作品は「つながる糸 広がる布」への展覧会にも出品したものである。京都新聞(平成30年8月26日)の記事として紹介された。「衣服は人生を記録、記憶し続ける大切なものだ」という言葉によってまとまれた。

結婚SANKA 2019 Spring Summer/株式会社カラフルカンパニー(平成30年1月)に結婚式の新たな在り方として掲載されている。

4-2 七五三の三/七五三儀礼服

七五三は無病息災や健康で生きて来られたことを神や家族に伝えるための大切な儀式である。七五三の三歳男児用儀礼服(図3)を制作。使用する材料は当人の祖母「ばあちゃん」がほぼ毎日着ていた寝間着。長い間着ていたこともあって生地そのものはボロボロ。しかしこのボロボロ感が独特の柔らかい風合いをつくりだしている。素材制作そのものにかけられた時間が日常の積み重ねであること、ほぼ毎日着ていてその都度洗濯していたのだから費やした時間は数十年。彼が生まれる前から素材はつくられていたことになる。そして生地 of 制作者(祖母)は無意識のうちに素材をつくりあげていた。これは前述したONOMICHI DENIM PROJECTからの省察からの考察結果である。そしてこの祖母が数十年かけてつくった材料(衣服)を藍で染めた。色褪せた衣服を藍色の衣服に染めかえた。藍は虫や雑菌を寄せ付けない効果があるとされていた染料であるため、意味を含ませやすい材料である。

私の制作は布にハサミを入れないが、今回は女性用のワンピースであったため男児用ツーピースのスーツにするため上部と下部にわけることのみハサミを使用し生地を裁断。それ以外は縫い止めることで長さや幅を縮め二歳児でも着られるように可変させるため「肩上げ」や「腰上げ」の模倣から上げ縫いによって制作してある。七五三当日は仕上がったスーツを着て着用者の父親が大事な時に使っていたネクタイを貸り、中には平成29年度制作の『可変の衣服』を着用した。『可変の衣服』は女性用の既製服を上げ縫いによって可変したものなので女児用となっていた。それを男児用とするため表を裏に裏

面を表面にするため釦の付け場所を表から裏に移動させた。女前の衣服を表裏を変えることにより男前の衣服とした。これは『おもてうらなし おもてなし』の表裏を特定しない衣服を制作したことを基に再制作したものである。釦を付け替える作業は男児の母親に依頼し、作業そのものを男児の近くでおこなってもらった。その結果『可変の衣服』は「ママがチクチクした服」へと変わり作業を含め記憶を追記することが出来た。

ここで着目したいことは衣服のもつ代名詞が「ばあちゃんの衣服」から「ボクへの衣服」に変化したことである。



図3 七五三の三/七五三の儀礼服 撮影：中川善行

4-3 あかくなつたちゃんちゃんこ/還暦儀礼服

ヒトは産まれてから節目を迎える度に祝い事をおこなう。本学教員が還暦を迎えるため学生と共に還暦を祝うための衣服を制作する。これはつくることだけに重きをおいたものではなく、「祝う」ことを含めた制作プロセスと儀礼終了後の「考え」「捉え方」の変化をも加えたものである。

本学学生に赤く染めても良い服、丸く切り抜いても良い服を持ち寄ってもらうことから始まった。持参する衣服素材の条件は綿などの天然繊維、もしくはキュプラなどの半合成繊維が含まれていること。集まった衣服を赤く染める。染めたものは持ち主に一旦戻し、円に切り抜く場所を決めて円に切りぬいてもらう。切り抜いた円を収集し集まった円を縫い止めることで赤いちゃんちゃんこを制作した。還暦を迎える日、学生には赤く染め円をくり抜いた衣服を着用して過ごしてもらう。授業終了後ちゃん

ちゃんこを渡しお祝いの歌を歌って集合写真を撮ろうとすると集まった学生をみて今日のドレスコードが赤い服であったことに気づく。(図4) また追々これらのコンセプトを説明すると円で構成された衣服は教員(還暦当事者)が着用し、くり抜かれた方の衣服が学生(還暦当事者以外)の着用であるとわかる。デザインというものは「なるほど」を提示するための方法論である。単なる衣服であったものが赤く染めることや円で切りぬくことで付加価値のついた衣服へと変えることができた。

学生の学びとして、繊維素材と染料の関わりを含めることができる。使用した染料が天然繊維、半合成繊維のみ染まる直接染料なので、綿、麻、キュプラなどは染めることが可能である。しかしポリエステルなどの化学繊維が含まれるものは染めることができないので、繊維と染料の関係について理解し、修学につなげることができた。

切り抜いた場所においても、身体の中の部分であるのかを振りかえりながら、具体的な意味との紐付けが重要である。衣服は身体の一部・行為・行動を疑似的に含めることができる。哲学的考察の中から省察行為を自覚することができる。学生が省察した「まとめ」は作品コンセプトを明記するプレート(図6)にまとめる事によって考えの変化を目視できるようにになっている。いらなかった衣服が儀礼服として提示されたことにより、抜き取られた部分が有効な穴として省察され、それらを「埋める行為」もしくは「魅せる行為」が今までの考え方の希薄さを見つめ直すきっかけを与えている。(図5)



図4 あかいちゃんちゃんこと着用した教員と赤い衣服を着用した有志学生

ここでもまた「わたしの衣服」から「先生への衣服」へと衣服の代名詞が変化したことがあげられる。



図5 学生作品 撮影：ハセガワヒロシ



図6 学生制作プレート

4-4 まとめ 考察と省察

本研究は当初より人から集めた衣服を用いて新たな衣服をつくるため、集まった衣服は価値や思いが詰まっているものが多いのだと思っていた。しかし、集まった衣服はどちらかというと持ち主が「不要である」と断定したものがほとんどであった。最初は集まったものを見て、触って落胆した。身近な人を祝うべきものをつくらうとしているのに何故不要であると断定したものを渡すのかと。しかし制作を進める中でわかったことは、人生儀礼における衣服の役割の低さである。人生儀礼に使用される衣服はレンタルという仕組みが確立しているため、衣服そのものに価値があるとは思われていない。ましてや思いが詰まった衣服が存在することも知られていないということである。物に溢れる現代の「物」に対する思いの希薄さを痛感した。しかし考え方によっては「不要なもの」「いらぬもの」が「役立つもの」に変わることの意味を含められれば、本研究に深みはますますである。「必要なもの」「大切な

もの」はそのまま受け継がれることは大にしてあるが、不必要なものが誰かの役に立ち後世へ受け継がれることにわたしは美德を感じる。何においてもだれかの不要がだれかの必然となるべく、わたしは研究に挑もうと考えるようになり、下記のようなコンセプトを導きだしたのである。

これまでに集めた布・衣服や集まった衣服はどちらかという所有者にとっては不要のもの。これらを「繕い」や「縫い」によってある人を祝うものとする、もしくは大切にしたいと思ってもらえるモノに変えてみようという試みに変わった。所有者にとって「いらぬ」「不要だ」と思っていたものを儀礼服として提示し、「いらなかった衣服」が「役立った衣服」に移行することを目的としている。本研究は人とのつながり方、関わり方を知る手がかりとなり、これからのわたしたちの暮らし方、生き方のヒントを得るきっかけになるはずである。これらのことから誰かの衣服であったこの衣服は所有者であった人と着用する人との二者によってあらたな衣服となったことである。本来衣服から向けられる矢印は着用者から衣服に向けて一方的なものになるが、誰かが着用していたものが誰かへの衣服へと変わる時、衣服から着用者に向けての矢印が追加されることになる。ここで着目したいことは衣服のもつ代名詞が「□□の衣服」から「○○への衣服」に変化することである。この「の」から「へ」が追加され「への」になることにとっても大きな役割がある。『おもてうらなし おもてなし』では「友人／家族の衣服」が「新郎／新婦への衣服」に変わり、『七五三の三』では「ばあちゃんの衣服」が「ボクへの衣服」に変わり、『あかくなっちゃんちゃんこ』では「わたし（学生）の衣服」が「先生への衣服」へと変化している。受け継ぐとこの意には「□□から○○への衣服」に変わることであり、関わった人が付随することで衣服としての記憶が追記され、携わった人だけでなく、構成した部分を与えてくれた人がその人が過ごしてきた日常と共に追加されることである。これは衣服を構成する要素が新たに追加されることにつながる。私の求める成果とは衣服を通して誰かと誰かがつながること、もしくは

衣服への価値観が変わること・変えることなのかもしれない。

また集めたものを組み合わせながら制作することは陶器での「よびつぎ」「よびつぎの文化」に通ずるものがある。「よびつぎ」という言葉が生まれたのは、地位も職業も教養も、それぞれ異なる人々が、どこからともなく呼び合うように集まって、足らぬところを補いながら一つのものを作りあげて行ったから⁽¹⁾。わたしの研究は集めたもの・集まったものを解体しそれらを再構築して新たな衣服をつくっている。集められた衣服には個々の日常や思い出、もしくは役割が含まれている。「よびつぎ」についての調査・研究は今後より深めてゆきたい。

口伝的要因とは日常の中に起こりうる「○○らしいよ」と言った伝言ゲームのようなもの。母から子へ、子から孫へと伝えられた些細な暮らしの在り方や暮らし方についての会話や所作によるものである。これらは全て日常の中の出来事によって、うみだされ育てられる事象である。特に人生儀礼においては人々が必ずむかえる儀礼であり、事象である。自身の七五三が終わろうとも他者が七五三を迎えるとき、自身の時はどうであったのかを親からもしくは本人が他者に対して伝えてゆくことが可能である。結婚、還暦、その他の儀礼においても同様に本人や周囲の人が口づてに伝えることができる。それはわたしたちの暮らしの中には節目を祝い、弔う儀式が多く存在するからであり、儀礼服が一過性の衣服であったとしても事象としてもしくは出来事として、思い出として常に口伝され続けるはずである。

5. 制作研究／もらった衣服・

布で人々が集う「場」をつくる

5-1 見知らぬ女性がのこした空

本作品は『見知らぬ女性がのこした青空』『見知らぬ女性がのこした灰色の空』『見知らぬ女性がのこした曇り空』の三部作からなるものである。

会ったことも、見たこともない、知らない人が住んでいた家を取り壊すため不要となった衣服や布を収集することからこのプロジェクトははじまっている。

わたしの知らないヒトが住んでいた家、女性がひ

とりで暮らしていた面影はない。散らかった家の中から衣服と布を持って余すほど頂戴した。わたし個人の主観を含めず「いる」「いない」の選別をすることなく、布であれば、服であればトラックにつめこみ運び出した。持ち帰った布や衣服の印象はとても冷たく感じた。もちろんしばらく太陽に当たることさえなかったので、現実的な印象も布の持つ感度も同様、「つめたく」感じたのだ。ひんやりとする向こう側にはどのような時間を費やしてきたのだろうと憶測してみるものの、知らない人だからこそ、何もわからない。ただ、衣服のパーツをみつけたとき、彼女がつくろうとしたワンピースやスカート、コートなどを伺い知ることが出来た。これはいつか着ようと思ってつくっていたのか、近所の女の子にでもあげようと思ったのだろうか、年を召した割には短いスカート丈、ほっそりとしたウエスト。想像の中の彼女はいわゆる老人なのだが、つくられているものはどこかしら若さを感じるものが多かった。数年間使われていなかったため、広げられることもなかったはずである。それらを肯定するため衣服や布には多くの埃がついていた。制作を行う上で安全性を確保するためこれらの布を洗うことから始めた。作業の中で布や衣服と向き合う時間の中で、「かもしれない」という想像を繰り返した。もしかすると彼女が若かったときに自身のためにつくろうとした物なのかもしれない。大切な日のために丁寧に畳んだものなのかもしれない。針を一旦とめ「いつか縫おう」と思い箆笥の奥へしまいこんだものではなかろうかと思うものが多く遺されていた。見知らぬ女性が残しておいた遺された生地や衣服にはいくつもの日常や出来事が含まれているのだろうと思いつつ洗濯を始めた。洗濯して干して畳もうとするときに遺されていた古めかしく重々しい布が単なる素材へと変わっていることに気がついた。重苦しかった布が洗濯、乾燥という工程を終えると全てが洗い落とされてしまったのだ。ここでも布を洗うべきか洗わぬべきかを考察する必要があった。ただ洗わないことには作業が進まず、解決策が出ないまま作業を進めた。何気なく始めた作業であったが洗うという行為は「アカをおとす作業」へと移行した。

素材へと移行した遺品の布・衣服にはもう重苦しさはない。

とても多かった生地素材はポリエステル。ポリエステルの白生地は産業を背景とした北陸という土地柄をあらわしている。ウールのセーターは虫食いだらけであるが、ポリエステルの布に有機的な穴は見つからない。そして北陸の生地を代表するP下が一番多く遺されていた。P下とはプリントや染色をする前の前処理された白色の生地。他にも色や柄をつけられる前の試作の跡が残る「試験反」や生地を生成した後に控えとしてとっておく「ふりおとし」や「おとし」、加工をする際に原反を機械の最後まで導く「みちびき」と工場から一切出ることのない生地が非常に多かった。遺された布を見るかぎり、これらは北陸でつくられ、北陸から出ることもなく、留められたモノ。私たちが普段手にするために蓄積された仕組みから、生地を生産する前に使われ続けた生地や「不良品である」「B品である」「不要である」いった理由で振り落とされたモノであった／モノであると推測した。

そしてこれらの「P下」「試験反」「おとし」「みちびき」等をつなぎ合わせる。布と布をつなぎ合わせるために使用した糸も勿論見知らぬ女性がのこしたものの。残された糸で残された布をつないでゆく。洗って干して、干しては畳む。畳んであったものを広げ、広げたものを洗い、それをまた広げて干す。干し終わるとまた畳む。という単純な作業から畳んで広げ、広げたものを畳むという行為には小さくも大きな意味が含まれていると考えた。

故人の意志を読み取り、「いつか」や「今度」を誰かに渡す。

何気ない日常の何気ない行為／行動から畳んで広げ、畳んで広げを繰り返す中から生まれた作品が『見知らぬ女性がのこした空』である。

『見知らぬ女性がのこした空』は知らないヒトの衣服や布、生活が閉じ込められていた家にあった、いつか使おうととっておいたであろう誰も使わないもの。つくりかけの衣服、穴のあいたセーター、畳まれた布によって構成されている。遺した生地から残された想いを空に見立てる。畳まれたものを広げ

られれば誰かを守り、彩るモノになる。と願いを込めてつくったものである。広げられることもなく、畳まれたままに遺されていたものをつなげ、広げる行為によって広い空間をつくることができる。畳まれたものを広げ、上空の彼方から見ているであろう見知らぬ女性に、主を亡くした衣服や布をみせてあげようと考えたためである。広げられることもなかった布が人々の頭上に広げられ、不要なものから逸脱した、守られる空間はあまねく人々の集える場となりうる。

北陸ではあまりみることができない青い空は青や水色を主として寒色の生地を縫い合わせ『見知らぬ女性がのこした青空』(図7)とし、北陸の空は灰色が多いと感じているためモノトーンの生地をつなぎ合わせて『見知らぬ女性がのこした灰色の空』(図8)とし、北陸の天候をあらわす代名詞の曇り空はP下である(もしくはP下になれなかった)白生地をつなぎ合わせて『見知らぬ女性がのこした曇り空』とした。

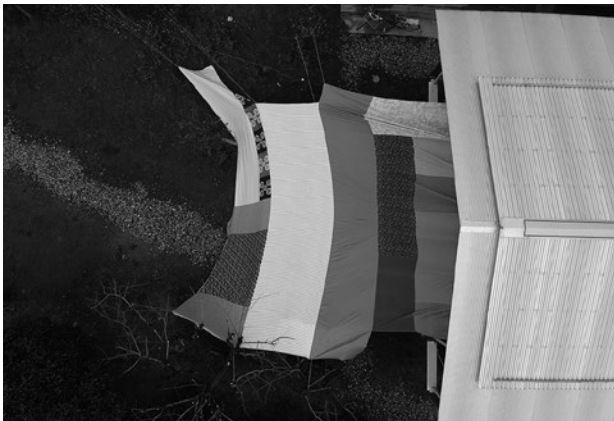


図7 『見知らぬ女性がのこした青空』 撮影：吉村正照



図8 『見知らぬ女性がのこした灰色の空』 撮影：吉村正照

長さが揃っていないのは、もともとの長さが違うから。知らない女性が溜め込んでいた生地は長さも色も分厚さも共通点は何一つ見当たらない。本来製品とされるポリエステル製のものは帯電防止剤が投与され、静電気がおきないようにしているのが普通であるが、最後の仕上げを通らなかったのか、劣化したのか、静電気が起きやすい生地がほとんどであった。生地を動かす際に生じる静電気は余分なものを吸い上げ寄せ集め、「不要だ」と断定された同類の仲間を引き寄せるような感覚を得た。

また白い生地は夜になれば光をうつす。それらは人が過ごしている日常の映像や写真を光とともに写すことを可能とする。『見知らぬ女性がのこした曇り空』は見る事が叶わなかった故人に対して現世に生きる日々の出来事や過去の出来事を見せる支持体へと変わる。(図9) 衣服が記憶するはずの記録や思い出は布でも記憶される。ただそれは映されたことを覚えていればの話。わたしたちは日常のちいさな暮らしの中に心を留めようとするのではないのだろうか。



図9 『見知らぬ女性がのこした曇り空』 撮影：吉村正照

つないで、つないで、つないでと生地之余りや反物としては短すぎる小反など、生地幅も違うし長さも違う。これらは規定外とされたもの。世間では不要だとされ捨てられるはずのもの。堅牢度が弱そうなものや汚染したもの、そして引き裂けやすそうなものが多かったが、不要になりえる布を展示するにあたり、展示中に起こり得た劣化や故障、それらを修復していくことも作品を提示するためのプロセスである。

今回ドローンを使用した撮影（図10）を行ったのは、もし見知らぬ女性が上から見ていたらこのように見えるのだらうという擬似的体験を追記するためである。

見る視点が異なれば感じることも違う。上から見下ろす、下から見上げる、もしくは同じ高さで見つ



図10 見知らぬ女性がみているであろう風景 撮影：吉村正照

め合うことを可能とする。

5-2 見知らぬ女性からのおすそわけ

本作品は『見知らぬ女性がのこした布』『見知らぬ女性がのこした衣服』『見知らぬ女性がのこした糸』（図12）からなるものである。

『見知らぬ女性がのこした布』『見知らぬ女性がのこした衣服』は全て洗って干したものの。『見知ら



図11 見知らぬ女性からのおすそわけ 撮影：ハセガワヒロシ

ぬ女性がのこした糸』を含め、これらを必要であると感じた人々に持ち帰ってもらうモノ・コトである。洗うことで重苦しかった生地や衣服が素材に変わったからこそ、素材としてわたし、もしくは素材

をそのまま提示し提供することに意があることに気がついた。その結果、これらの布・衣服はわたし自身が手を加え、抱えることよりかは、誰かに渡してゆけるきっかけをつくりたいと考えたためである。

あくまで憶測であるが、亡くなった彼女が生きていた時代は「捨てる」ことが選択肢に無い時代。「もったいない」という考えが主流であったため溜め込まれたものであろう。

モノを大切にしていた女性からいただいたもので人々が集う「場」をつくり、使わなかった、もしくは使えなかった生地・衣服はおすそ分けする。

つなげた生地にはつなぎ目があり、「つないだ」という記しをのこしてある。それらを自由に切って持って帰ってもらう試みである。わたしにとってとても否定的な布を切るという行為を肯定的にするために考察した結果、誰かとつながる場所をのこしてもらうための行為を意匠のひとつとして取り入れた。知らない誰かが自身とつながる場所を持っているということに意味を含ませる。（図13）

わたしたちの生活・暮らしは誰かとつながっている。地位も職業も教養も、それぞれ異なるあまねく



図13 誰かとつながる場所をつくっている様子

人々が、どこともなく呼び合うように集まって、なにかを作り上げてもらえるなら、大切に保管されていた、いただいたものだからこそ自由に持って帰ってもらうことが最良であるはずだ。

小反や小反にもならない生地をつなげただけの生地。しかしそれは誰かとつながる場所を含めながら各人が持ち帰ることができる。この世の中の誰かとつながるための場所は前に来ていた人が切った場所から次の人へとつながる。ハサミによって切断された場所がいつか誰かとつながる場所になる。本作品はハサミで切るという残酷的に捉えていた行為に新たな可能性をもたらしてくれた。これは「いつか」という言葉と意味を含ませた作品である。

5-3 まとめ

わたしたちは常に衣服を畳んで箆筒の中で保管する。保管というよりはしまっておく程度のことであるが、衣服を洗い、片付ける際には当たり前のように畳む。畳むことはとても単純な行為である。そしてそれらを着ようとする時、使おうとする時、ひろげる。広げるといふ行為によって解き放たれる気持ちがあるとすればそれらは小さな約束事を果たすことではないだろうか。

わたしたちが布や衣服をひろげるとき、放たれた願いは再び畳むときにまた新たに小さな約束を再び結ぶのである。わたしたちは遺されたものを拾い、つなげることから新たな可能性を見出した。誰かがつないだ生地は誰かによってきりとられ、また別の場所で畳まれていつか誰かのためにしまってもらえるかもしれない。サイズも色も何もかもバラバラであったが、一枚のつながった布はわたしの知らない人や知っている人によって裁断される。そしてその人達の日常に溶け込み、その人の生活に寄り添うものとなるはずである。一人の女性が溜め込んだたくさんさんの生地を広げることによってその人の溜め込んだであろう時間をその女性が見ていると思われる場所で広げた。それだけでなく一人の女性がいつか使おうと思っていたものを多くの人に譲渡した。使われなかったものは彼女の知らない人の元で使われているだろう。見えない想いを見えない場所で叶えるという活動に移行した作品となった。

6. おわりに

衣服について、ファッションについて、テキスト

イルについての研究から日常的な所作の中に衣服や社会、人々が抱える問題を解決する緒があるはずである。「わたしの衣服」が「あなたへの衣服」に変わり衣服への矢印が追加されることで、衣服には新たな記憶が追記される。わたしたちは遺されたものを捨てることも、拾うことも、つなげることもできるのだと調査・研究・制作を通して感じた。わたしの制作にはどこかに活動が含まれる。活動といった大それたものではなく出来事程度のちいさなコト。わたしはそんな小さなコトを大切にしたいと思っている。所作といえるほどのことではない。畳むという行為の中にわたしたちは小さく約束をする。

「明日着るね」「明日使うね」もしくは「今度着るね」「今度使うね」。畳むことは「いつか」ということばが含まれる。「いつか」や「今度」には次へのつながりをあらわしている。畳むことで約束を交わし、広げることで約束をはたす。

民俗学者の田中忠三郎氏は「偉い人は歴史に残る。普通の人には残らない。モノも同じだ。いいモノは残るが、日用品は残らない。でも本当の歴史や文化が日用品にある」⁽²⁾と言っている。

わたしたちの日常は些細な出来事によって成り立っているはずだ。何事にも終わりが無い現代だからこそ次に絆げてゆきたいコトやモノがあり、それらを伝えるヒトがいる。先人たちはモノをつくり、コトを企て、ヒトづくりへとつなげてきた。

暮らしの中の小さな約束から「モノづくり」「コトづくり」「ヒトづくり」へとつながるからこそ、何気ない日常の何気ない行為や行動に意味を含めてゆきたい。それらは人々の生活や暮らしをより豊かにすると強く思う。

謝辞

本展覧会の実施にあたり福井仁愛学園共同研究費助成を受けましたことを感謝するとともに、制作・研究においての助言をいただきました金沢美術工芸大学 大学院専任教授 橋本真之先生、横山勝彦先生に心より御礼申し上げます。

協力

仁愛女子短期大学教職員 仁愛女子短期大学 生活科学学科 生活デザイン専攻有志学生 真空ラボ
ヒュッテナナナ 荒木優光 西澤祐介、穂乃花
愛しのひこうせいくんとゆかいななかまたち

引用文献

- 1) 白洲正子『風花抄』
／世界文化社／1994（2009第16版造本変更）14頁
- 2) 朝日新聞2012年1月26日付夕刊、2019年2月28日付全面広告

参考文献（引用・参考文献など）

- 田中忠三郎『物には心がある 消えゆく生活道具と作り手の思いに魅せられた人生』／アミューズエデュテインメント／2009
鷺田清一『てつがくを着て、まちを歩こう ファッション考現学』／ちくま文庫／2006
鷺田清一編『ファッション学のすべて』／新書館／1998
『着ること／脱ぐことの記号論』日本記号学会編
アーツ前橋 住友文彦＋辻瑞生＋小田久美子『服の記憶 - 私の服は誰のもの?』／(株)ピー・エヌ・エヌ新社／2014
長野五郎『インターテクスチュアリティ視ることの織物 長野五郎1971-2011』／美学出版／2011
藤田結子＋成実弘至＋辻泉『ファッションで社会学する』／有斐閣／2017
ロラン・バルト [山田登世子訳]『ロラン・バルトモード論集』／ちくま学芸文庫／
鷺田清一『ひとはなぜ服を着るのか』／ちくま文庫／2012
野口光『野口光の、ダーニングでリペアメイク』
／(株)日本ヴォーグ社／2018
『糸のみほとけ』奈良国立博物館
山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』／世織書房／2005
Rechael Matthews『the MIndfulness in Knitting』
／Leaping Hare Press／2016
白洲正子『風花抄』／世界文化社／1994（2009第16版造本変更）
田中元子『マイパブリックとグランドグランドレベル - 今日からはじめるまちづくり』／株式会社晶文社／2017
苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 編『ワークショップと学び1 まなびを学ぶ』／東京大学出版会／2012
加藤文俊・木村健世・木村亜維子『つながるカレー コミュニケーションを「味わう」場所をつくる』
／株式会社フィルムアート社／2014
ナガオカケンメイ『D&DEPARTMENTに学んだ、人が集まる「伝える店」のつくり方 学びながら買い、学びながら食べる店』／美術出版社／2013